③ can の用法

実現可能な潜在性をあらわす

can の用法とは

can は奥にひそんでいる実現可能な潜在性をあらわす助動詞です。ここから①「～できる」という“能力”と②「～のことがある」という“可能”、③「～してもよい」という“許可”の、3 つの用法が出てくるのです。「潜在性」という少し難しい言葉を使いましたが、例えば、次の英文をご覧ください。「スキーができないよ」と言っている子供を元気づけるために、次のように言うとしましょう。

＜能力＞　You can do it.　（君ならそれをできるよ。）

つまり、「潜在性」とは、現時点では実際にはできないかもしれないけれど、努力したり、条件が変わったりして、奥にひそんでいる素質が引き出されさえすれば、実際にできるようになると考えられるような能力のことなのです。ただし、上の英文では、話し手が何らかの客観的な根拠にもとづいて「君ならそれをできるよ」と言っている必要があります。例えば、「君は水泳もできるし、野球もできるんだから、スキーだって練習すればできるようになるよ」といった客観的な判断を、話し手がしている必要があるのです。このように、can のあらわす「潜在性」は、何らかの客観的な根拠にもとづいていなければならないのです。もう 1 つ、「潜在性」について気を付けなければならないのは、can の「潜在性」は、能力がひそんでいる場合だけではなく、すでに能力が表にあらわれている場合も含んでいるということです。

＜能力＞　She can speak English.（彼女は英語を話せる。）

上の例文では、「彼女」は英語を話す潜在能力を持っているのみならず、それを表にあらわして、英語を話しているのです。can はもともと know how to do「～する方法を知っている」という意味の動詞でした。ここから「方法を知っているからできる」という意味と、「方法を知っているので（現時点ではできないが）しようと思えばできる」という意味を持つようになったのです。

次に、“可能”の用法を見ていきましょう。

＜可能＞　Even teachers can make mistakes.
（先生でも間違うことはある。）

可能性をあらわすこの用法も、やはり潜在的な意味を持っています。「先生」も人間である以上、間違うことだってあるという潜在的な可能性です。

次は“許可”の用法です。